

研究論文

基本動作からのトレーニング

ー 英語科教育法の模擬授業とシラバス改善のとりくみ ー

齋 藤 安以子

Training from the Very Basics: Stage Practice in Primary EFL Teacher Training Course

Aiko SAITO

【要 約】

英語科教員の養成課程にいる学生たちが教育実習前に習得を期待される多くの項目のうち、実際の授業を成り立たせる基本的な動作や効果的な指示の出し方などは、時間をかけてくりかえし練習することでしか身につかない。以前は受講生たちの自主練習にまかせていたこの点を英語科教育法科目の毎週の学習項目に取り入れることで、格段に模擬授業のパフォーマンスと相互評価の精度があがってきた。将来的に学生たちがさまざまなプレゼンテーションや資料作成に応用していける技能でもあるこれらの基本動作の実践的な演習の試みを報告する。

1 はじめに

全国の中学・高等学校の実習指導教員を対象にした調査によれば、「実習生に対して大学側で指導してほしい内容」として、教材研究や指導案作成、英語力、模擬授業、機器操作、指導技術という6項目が多少の差はあれ、どれも重視されているという結果がでている。しかし、同時に、実習生たちが大学で指導されているとは思えないと現場で受け止められているのが、6項目のうちの模擬授業、機器操作と指導技術である。¹ これらは実習生自身が体験して学ぶ必要があるため、習得にも上達にも時間がかかる。課程の中で教育実習が1回であることを考えれば、実習の前はかなり実践的な練習を行って必要な技能を身につけておかなければ、養成課程の間に一定レベルの授業を行えるようにはならない。²

教育実習校で本当の生徒を相手に授業できる人材になるべく学生たちが3年次後期・4年次前期に履修する英語科教育法 II/III (旧: 英語科教育法) を担当する筆者は、受講生の出来や彼らからのフィードバック、そして実習受け入れ校で会う現場の中学・高等学校教員からのフィードバックをもとに、模擬授業を中心とした半期の授業の内容改定を繰り返してきた。小論では、主に2004年度から2007年度にかけて、摂南大学の英語科教育法のクラスで外国語としての英語教育・日本語教育の教職課程を修めていた学生たちとの取り組みを報告・分析する。

2 ニーズ分析：教育実習前教育に求められること

2.1 受け入れ校から見たニーズ

ゼミの学生たちの教育実習期間が終わりに近づく頃、研究授業の見学とお礼のために受け入れ校を訪問する度、実習生を指導してくださる現場の担当教員に筆者は先の調査と同じ質問を口頭でしている。

「実習前に学生に身につけておいてほしいと思われることは何でしょうか」

目の前に実習生がいないときに、筆者自身が英語科教育法科目の担当教員だとは告げずに質問をするので、たいていは忌憚のない実習生評とともに答が返ってくる。返答は概して担当科目に関すること、授業をする者の心構え、教育一般に関することに分かれている。

担当科目に関しては、その科目（ここでは英語）を教えることができるだけの高い学力が求められている。また、実習生本人が客観的に自分の足りないところを自覚してさらなる勉強に努めることも期待されている。同じように大学在学中に海外留学した学生たちの中にも、ごく自然に適切な例文が作り出せるようになっている学力優秀な学生もいれば、外国人教員に物おじしない態度は立派だが英語の発話があまりにブロークンで教室では生徒のモデルになりえないレベルの学生もいる。「正しい発音と文法知識を身につけてから実習にきてほしい。」という教育現場から当然のリクエストを度々受ける。

¹ 高梨庸雄、高橋正夫 『新・英語教育概論』 pp.175-176

² 教育現場での観察実習や省察を繰り返しながら理論と実践の融合した反省的実践家の養成をめざすイングリッドやカナダでは、教育実習そのものの期間が日本に比べて長く、また回数も多い。(木塚雅貴 「イングリッド・カナダにおける教員養成の比較研究」 pp.4-5)

授業中の振る舞いだけでなく、「準備段階から後片付けまで、自分の責任で行えるようになってほしい。」「授業をしたら振り返って改善する習慣を。」という授業時間以外の作業へのコメントもいただいた。実際、訪問した日の研究授業の見直し会を、校長先生、教頭先生、実習生担当指導教諭、実習生と筆者の5人で開いてくださった学校もあった。

教育が科目の学力向上だけを目的にしているのではないことも、実習生にわかっていることの一つにあげられている。担当授業以外の時間の生徒の様子に関心を持つ姿勢が、実習生にも求められている。至らない点について耳が痛いコメントが多いなか、これについては実習生が実践できていると褒められることが多い。生徒との年齢の近さが有利に働くためか、実習生の一生懸命さが生徒に伝わるようである。生徒の多面的な理解は授業においても彼らに身近な話題や興味を持てる内容の選択につながり、結果的に、わかりやすい授業展開にも役立つ。³

教育一般に関しては、実習生といえども、中学校・高等学校のカリキュラム全体を俯瞰して理解する姿勢が欲しい、とも言われた。中学2年生の英語担当だから、と英語のその部分しか見ないのではなく、その学年が前年度学んだこと、次の年度に取り組むこと、さらに英語以外にどのような学科内容を今学んでいるのかを知るようにしてもらいたい。これはクラス担任の数学担当教員からのコメントだった。

2. 2 受講生から見たニーズ

英語科教育法 II/III の受講生が自覚しているニーズは、学期の途中や学期末のアンケートのフィードバックに見ることができる。例年、「もっと発音について勉強したい。」「自分のリスニング力が上がる学習方法を知りたい。」といった担当科目の学力強化を願う声から、生徒を引き付けるいろいろな教授法を具体的に知りたいという声、また、教えるににくい状況に陥ったらどう対応したらよいか、というトラブル対処法を求める声などがある。このほか、授業中の教員の動作に関わる「わかりやすいきれいな板書のコツが知りたい」や「人前で上手に話せるようになりたい」などのトレーニングの希望も出ている。実習前であるものの、受講生たちは授業を一人で任されればどれほど多くの知識や技術が必要なのかをよく考えている。

例年、「いい先生とはどんな先生か」というような哲学的な問いもあれば、「授業で使うプリントの作り方」「生徒が集中する英語のゲーム」のように参考例を形で示しやすい項目もある。さらにこの2・3年の間に増えてきたのが、次に挙げるような生徒とのコミュニケーションの取り方と、学習の動機付けに関する項目である。

「みんなの注意の引き付け方が知りたい。」

「どうしたら言うことをきいてくれるか。」

「授業についていけない子のやる気の出し方。」

「どうすれば授業中に生徒全員に目を向けることができるのか。」

地元の小・中学校で授業補助を担当した学生や、キャンプライダー活動を通して中学生や高校

³ 米山朝二、杉山敏、多田茂 『[改訂版]英語科教育実習ハンドブック』 p.5

生の指導をした学生は、年齢が近くても自分とはまるでちがう行動をとる世代の子供たちを知っている。教室でその子供たちを多数、同時に対応することがベテラン教員にとっても簡単ではないことも、これらの学生は理解している。

実習受け入れ校と受講生双方からのフィードバックに答えて、英語科教育法の授業では、英語のさらなる勉強の仕方を紹介することはあるが、英語の勉強だけに専念することはない。受講生たちに、実習先で必要とされる英語の能力レベルを早い段階から繰り返し伝えることで、自主学習を促す。また、授業の準備から片付け、振り返っての改善点の確認などは、模擬授業を通して確実に全員がそのプロセスを体験するよう、補講や課外授業を開いている。カリキュラム全体を見る視野の獲得については07年度の授業で初めて、実際に授業で実習先の学校のカリキュラムを調べる作業を行い、共時的・通時的にさまざまな枠の中で担当授業を考えることに言及した。生徒を多面的に知ることが、「学習がおこなわれやすい状況を創る」という教員の役割に必要なことも、折にふれて授業で解説している。⁴ このほか受講生からの質問やコメントには、授業中に該当項目を課題として取り入れたり、参考資料を紹介したりすることで随時答えてきた。

2. 3 授業担当者からみたニーズ

受講生と実習受け入れ校のフィードバックをもとに調整をすると同時に、授業を担当している側が判断して変更しないことにしたり、新たに取り入れたりしてきた点もある。2004年度から2007年度にかけて、3年次後期の学生を主な対象に開講している英語科教育法の授業内容は、図1のようになっている。前半で理論・後半で模擬授業、というペースは、受講生から「もっと早くから模擬授業をしたかった」というフィードバックを受けてからも変えていない。授業を計画するのがおもしろいと感じてくれるのはいいが、やはり幅広い知識を先に学ぶという点はゆずれない。

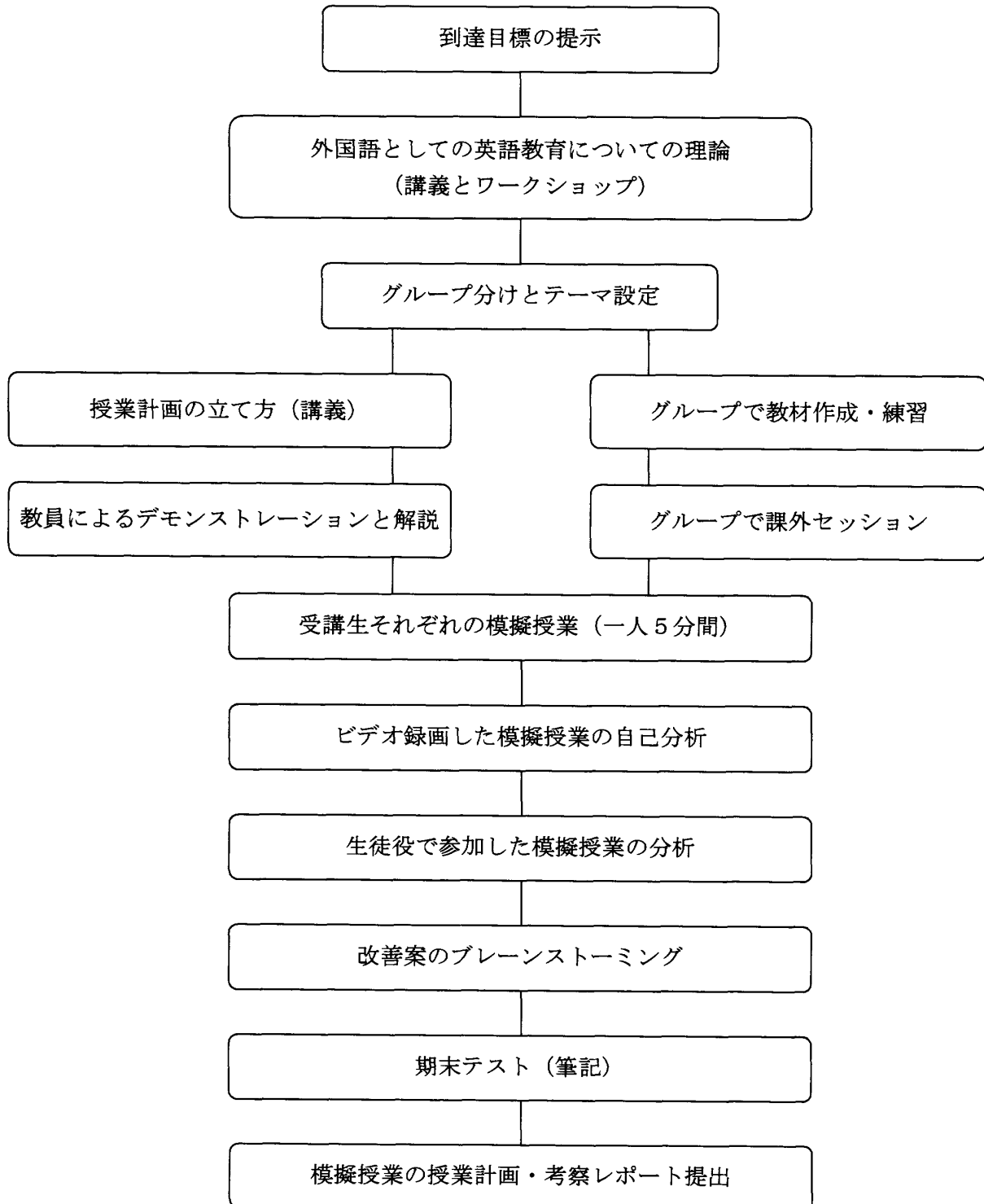
学期の初めに、前年度受講生による優秀な模擬授業をビデオで紹介し、学期末の到達目標を提示する。課題を言葉で説明するよりも、先輩が5分間一人で英語のみの授業を始め、進行し、まとめる流れを見せるほうがわかりやすいらしい。前半の第1週～6週は、外国語としての英語教育についての理論についての講義とワークショップである。分野別の教授法・学習活動(発音・リーディング・リスニング・ライティング・スピーキング等)をサンプル教材で体験したり、受講生自身が教材を作ったりする。また、授業に使える教育機器や人材といった側面から、音声教材や映像を使った授業について学んだり、チームティーチングについて元AETのゲストにデモンストレーションや講義をしてもらったりした。

第7週以降の後半に入って、模擬授業のグループ分け(最大4人)とテーマ決定を行う。グループは受講生同士で決め、提示したいいくつかのテーマから共同で準備するものを選ぶ。課題の「教員役も生徒役も英語だけを使う授業5分間」は、意識的に教員の発話を計画させることを狙っている。そのため、テーマも英語だけで導入できるものをあげている。例えば「how to

⁴ JACET教育問題研究会 (1998), p.37

～」、「can」、「things in the house: kitchen」、「time」などである。

図1 英語科教育法 3年次後期の授業内容



さらに授業担当者（筆者）による英語以外の外国語の模擬授業のデモンストレーションを行い、進行の方法や教材分析、授業計画の立て方の説明を行う。それと同時に、授業時間中に30～40分くらい、グループに分かれて準備する機会を2回もうけている。加えて、授業外に2・3グループごとに授業担当者と課外セッション（30分～×2回）をし、教材作成の相談や、練習をする。この課外セッションでは、教室での授業とは異なるアプローチを用いている。授業では教員が新しい情報を与えるティーチングを主なスタイルにしているが、課外ではもっぱら教員が学生に質問をして学生のアイデアを引き出し整理するのをサポートするコーチングの手法を用いている。いろいろな授業展開を模索し、模擬授業という近い将来に自分がどのように行動するのかを考え、実現のために行動することを手伝う。⁵

第10週～13週にかけて、受講生によるすべて英語の模擬授業を行う。グループで同じテーマを準備しているが、それぞれが違う目的の授業を5分ずつ行い、授業の開始や終了、教材の撤収も自分で責任を持つ。ビデオ録画した模擬授業の自己分析は授業時間外にそれぞれ行う。⁶ さらに、生徒役で参加した他の受講生の模擬授業の分析と批評を記名でメモし、模擬授業担当者に直接渡す。

最終回のクラス（学期が13週の場合は1回補習授業を追加）で模擬授業全体の改善案のブレインストーミングをし、必要があれば筆者がコメントや質問を追加する。受講生は教育実習までに自己研鑽の必要を感じたことを強化する課題を宣言し、授業を終了する。たいていは英語の力をつけることについてで、「テレビの語学講座をシャドーイングする」「大学で使った英語のテキストを1冊音読する」や、声が小さかったから「発声練習する」や、ビデオに映った自分の姿を見て「姿勢をよくする」というものもあった。

期末テストは教授法や授業計画に関する筆記問題と、年度によってはその年の公立高等学校の入試問題の模範解答作成を科す。さらに、受講生自身が担当した模擬授業の授業計画とその改善案、および考察をまとめたレポートを提出する。最終成績では、模擬授業の取り組みと、期末テスト、レポートを総合的に評価している。

以上の授業内容は、費やす時間数やサンプル教材の変更はあっても、大筋のところは、ほぼ変えなかった。逆に、誰からもフィードバックで言及はされなかったが、授業担当者の目で見ると変更の必要があると感じた点がある。同じ授業内容でも、受講生の一部が徐々に到達できなくなっていると思われる点が出てきたのである。受講生による模擬授業の（シナリオではなく）パフォーマンスの質と、その分析能力である。2004年度までは、受講生を見ていて不安を抱くことはなかった。授業時間以外にも学生たちが集まって自主練習を繰り返した上で模擬授業に臨んでいたうえ、たとえ模擬授業で満足できるパフォーマンスでなかったとしても本

⁵ 本間正人 『[図解] ビジネス・コーチング入門』 p.55

⁶ 2003年度以前は、ビデオ録画したものをグループに2本ずつVHSテープにコピーして渡し、学生たちが交代で見っていた。摂南大学にCALL教室ができてからは、学内LANで視聴できるVideo On Demandのファイルの中に録画した模擬授業の映像をグループごとに載せていただいている。学生たちは空き時間にいつでも、何人でも、CALL教室や情報処理室で模擬授業の分析ができる。メディアセンターとCALL準備室スタッフの技術のおかげでこういったことが格段に便利になった。

人がそれを自覚していた。ビデオによる自己分析でほとんどの問題点は理解し、同級生からは的確かつ誠実な評価があった。ところが、2005年度以降、授業計画はだいたい立てられるもののそれを実現させられないケースや、例文と教材は考えたが進行の練習をしないで模擬授業に臨んだと思われるケース、⁷ 指示が不鮮明で生徒役とコミュニケーションが成立していないにもかかわらずビデオを見て「まあできた」と自己評価してしまうケースが少数ながらできてしまった。そして、そういった準備不足の模擬授業に対して、生徒役の受講生の相互評価が甘い。

大学で開講している科目は、受講生が科目合格に必要なレベルに到達できなければ不合格になり、学生にとってそれが必要なら再び履修する。が、問題は、この科目の3年次後期の不合格判定がその学生の4年次での教育実習行きを引き留められないことにある。出来がいまひとつでも、自覚が足りなくても、彼らは教育現場に実習生として立ってしまう。授業担当者としては、不合格レベルの学生が出ないように、手を尽くして全員が合格レベルまで到達できるように授業を企画しなくてはならない。効果的な動き方や練習の必要性がわからないのであれば、授業を通してそれを学び、練習して上達するプロセスを実感させなければならない。

理論学習 >> 参考例を見る >> 自分の模擬授業

の3段階では、自分ができなかった行動についてのフィードバックを受けるのが、最後の模擬授業以後になる。しかし、

理論学習 >> 技術を練習 >> 参考例を見る >> 自分の模擬授業

の4段階になると、これまでよりも早い段階でフィードバックを受けて各自のデリバリーの弱点が明らかになり、練習の必要性も自覚するようになる。

授業担当者から見た受講生達の新たなニーズは、科目教育の枠を超えたところにある、しかしそれが身についているかどうかで科目教育の効果がまるでちがう、メッセージを確実に伝えるための身体の使い方であった。次の章では、2006年度と2007年度から授業内容に取り入れた、教員としての教室内での基本的な身体動作のトレーニングをあげる。

⁷ 原因の一つは、カリキュラム中に選択科目が増えたことから、前年度の学生に比べてグループ全員が集まれる共通の空き時間が減り、就職活動の前倒しで3年次の秋から企業説明会に行くようになったりしたため、一緒に練習できる時間が減ったことだと考えられる。

3 授業における基本動作トレーニング

授業において教員が学習者にメッセージを効果的に伝えるためには、選び抜いた情報をどのように伝達するかというデリバリーの部分が肝心である。対人コミュニケーションの技術については、教員養成のためのテキストよりも、演劇やプレゼンテーションのテキストやビジネスマン向けの営業活動のアイデア集などが詳しい。このトレーニングは教室内での効果的な情報伝達を目的として行った。視覚優位・聴覚優位・身体感覚優位・言語優位といった多様な学習スタイルに対応できるように、いろいろな媒体を使った伝達方法を扱った。⁸ 授業では、教員の声・動き・学習者が視覚で捉えるもの、の3つの側面から、毎時間少しずつ解説と動作の練習をした。前回導入した動作も随時繰り返し、ときどき複数の項目を合わせた復習をしている。授業の中でこれに費やす時間は短いときには10分、長くて30分くらいであった。

3.1 声と言葉

例え文法的に正しくても、また情報として正確でも、それが聞き手に確実に伝わり、大切な情報だと思ってもらえるとは限らない。教員は生徒が学習しやすい環境で教材提示や学習活動の指示を受けられるよう、工夫する必要がある。音声言語を介した伝達については、音の出し方、発声のコントロール、タイミング、言語表現、ほめる行為などが練習項目となった。

教室では長い時間楽にききとりやすい発声ができなければならない。クラスでは、立って両足の踵だけ、つま先だけに交互に体重をかけて体の重心移動の体験をし、丹田を意識した安定した立ち方、肩を回して上半身の力を抜く方法、壁に踵・腰・肩・二の腕の後ろ・後頭部が着くまっすぐ上に伸びた姿勢の取り方などを学んだ。さらに、教室の前と後ろに分かれて、一斉に、遠くにいる自分のパートナー相手に話しかけてそれぞれのメッセージを聞き取ってもらう練習などをした。

英語の発音に関しては、正しい発音について復習した上で、教員としての音の出し方を学ぶ。教室で生徒が聞き取りやすい教員の発音には、受講生の多くが自身の学習目標としてきた「ネイティブスピーカーのように自然な会話の滑らかさ」とは異なるメリハリやスピード調節が必要である。それを実感するため、受講生はペアになって、一人が英文を3回読み上げ、もう一人が初めて聞くその英文を書きとる。その後、正解と照らし合わせて、書きとりをした側にとって難しかった部分や、わかりやすかった部分の読みあげ方について意見交換をした。母国語にない音の組合せや、数字、予想外の情報、言語情報の区切りと読み方の区切りの同期など、わかりやすさを構成するさまざまな要素を認識する機会となった。

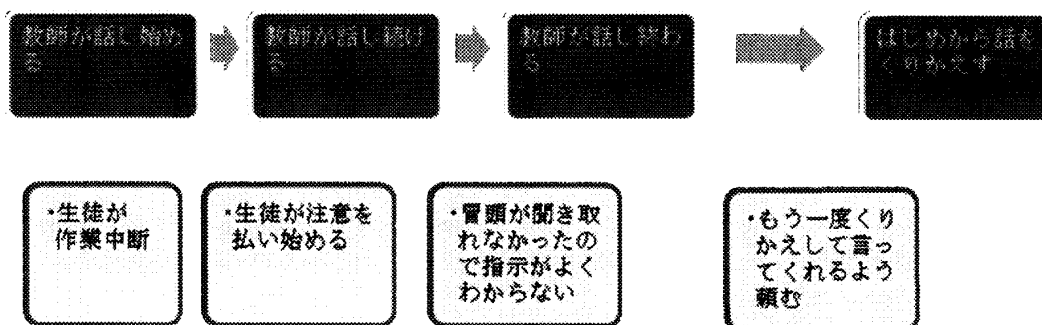
教員の指示が学習者にもれなく伝わるためには、発声以外にも、タイミングと表現方法の要素が関わっている。話し手が何か言い始める時点と、聞き手が注意を払い始める時点でタイムラグがあると、情報はうまく伝わらない。そこで、まず聞き手の注意をひく呼び掛けや何らかのはたらきかけをし、相手の意識のはっきりしたところに情報を届けることを考える。さらに

⁸ 市毛恵子 『「教え上手」になるためのスキル』pp.176-179

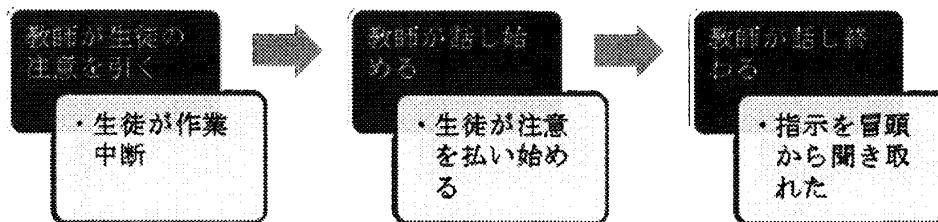
時間をさかのぼって、聞き手の注意をひく前に、聞き手の様子を一瞥してもっとも自然に彼らの現在の行動を中断させられるタイミングをはかると、生徒が出された指示を理解しやすい状況を作ることができるので、教員が同じ指示を繰り返す必要も減る。(図2) コミュニケーションのための声のポイントは、扱う情報を絞り、聞き手の今の状況を見極め、適切な音を使うことにある。⁹

図2 聞き手の注意を喚起する効果

タイムラグあり



タイムラグ解消



また、行動の指示は肯定表現のほうが、効果がある。禁止する事柄を言う代わりに、どうしたらよいのかを言うのである。例えば、学習活動のためにグループごとに配布した封筒の中身を次の指示まで見せたくなければ、「まだ開けてはいけません。(“Don't open the envelope yet!”)」ではなく、「みんな封筒を受け取りましたか？ 持ち上げて見せてください。(Have you all got the envelope? Please show me!)」の方が生徒の行動を導きやすい。持ち上げた状態であれば、勝手に封筒を開ける動作もしにくいため、当初の目的も達成できる。授業の進行に求められる状態（ここでは教材の封筒の中身をまだ見ない状態）を実現しやすいよう、教員が自分の話し方を簡単にコントロールする方法の一つである。

学習者に対する肯定のフィードバックについては、言語音、非言語音、ジェスチャー、といったさまざまな方法をとってほめる練習をした。言語音では、学習言語ではめる表現を教師向

⁹ 絹川友梨 『気持ち伝わる声の出し方』 pp.46-47

けの参考文献¹⁰ から集め、実際に口に出して自分が言いやすいものを覚えて、互いに笑顔で言ってみた。非言語音やジェスチャーでも生徒のパフォーマンスが良いということを伝えられる。答えている生徒にうなずいたり、笑顔を返したりすることで、言語メッセージを強化することができること、逆に非言語メッセージが言語メッセージのほめ言葉と矛盾していると、生徒はほめられたと感じないことも体験してもらった。

音声面での基本動作のトレーニングをまとめた復習が、「授業で新しいゲームを導入する」という設定で、実際に「教室の生徒の注意をひく・新しいゲームをすることを伝える・教材を渡す・ルールを説明する」という一連の動作をグループに分かれて教員役と生徒役になって練習した。この場合、教員役が口にする英語の指示はすべて大きな字で板書してあり、受講生は自分が何を言うかに迷うことなく、「どう話すと効果的か」という点に集中して練習することになった。いつ教材を手渡すのか、表情はどうするのか、話す速さはどれくらいが適切か、といったことは、交代で教員役をつとめながらそれぞれのグループで互いにフィードバックしており、同時に、教室に散らばった数グループの進行状況を観察している筆者が適宜全体に注意点を喚起した。声による伝え方のちがいが伝わり方のちがいにつながるという点は、言語教育を学ぶ受講生には非常にわかりやすかったようだ。言葉を効果的に使いたいという意識があるため、ほめ言葉の練習などにも照れずに積極的に取り組んでいた。

3. 2 視線とジェスチャー

その次にプレゼンテーション技術としてトレーニングをしたのが、視線とジェスチャーの扱い方である。教員にとって自分の視線の使い方は対象の生徒に関する情報収集にも役に立つうえ、生徒の視線をうまく導くことができれば理解の助けになる。筆者自身が教員養成課程で学んだことの一つだが、生徒がいる教室に入室していく場合、教員は劇場の舞台に登場する俳優と同じ立場にある。登場した瞬間からすべてのパフォーマンスが始まっているのだ。受講生たちには、ドアを開けてから教卓に到着するまで、生徒に背中を向けることなく、かつ教室全体を見渡して挨拶しながら入室する練習をし、ビデオ撮影で生徒側からどう見えているのかを確認させた。無理なく生徒たちに顔を向けようと思えば、逆算してドアを開ける方の手や教材を持つ方法が決まってくる。また、入室するときにはドアから遠いほうに視線をむけておき、移動するにつれてドアに近い方に視線を動かしていけば、すべての方向に正面から顔を向けて見渡すことができる。¹¹ こうすれば入室するときのほんの数秒で、生徒たちの今日の授業前の状況を把握できる。日々の学級経営の基本でもあり、予定していた授業案を調整する最初の機会でもある。¹²

生徒の視線を上手に教材に集めるのも、教員が身につけたい技術である。授業では、ビジネ

¹⁰ 永井淳子、粕谷恭子 『小学校の英語 教室で使える基本表現 200』 pp.58-66

阿部フォード恵子 『教室ふれあい英語表現集』 pp.83-86

Bryan Gardner, Felicity Gardner 『教室英語ガイド』 pp.46-49

¹¹ スティーブ・コーエン 『カリスマ手品師に学ぶ超一流の心理術』 pp.100-122

¹² 稲田百合、長津芳、奥山文子 『新任教師のしごと 学級経営の基礎・基本』 pp.58-59

スマン向けの営業活動のテキストやアイデア集を参考に、対象を指し示す動きを練習した。声のトレーニングで言及したように、まず生徒の注意を一か所に集めてから、その注意を目的の場所である教材の特定の部分に誘導すると、生徒の方もどこを見ればよいのか迷うことがない。¹³ 教員自身の視線や体の傾斜を目的地に向けること、また、指示したときの教員の指や手をびたっと止めて動かさないことなどを、いろいろな大きさの教材を使って実演してみせ、受講生が交代で練習した。英語を教えるための教員養成のテキストにはこのような情報はないが、教室で教えるために欠かせない動作であることは確かである。毎年、模擬授業のビデオ録画を見た受講生のコメントに、「自分が無駄な動きをしていた」「視線が定まらず、からだもフラフラして挙動不審」というものがある。自分の言葉を選び抜くと同時に、動きもまた、生徒の視線を集めて導くために選び抜く必要がある。

3. 3 板書と視覚資料

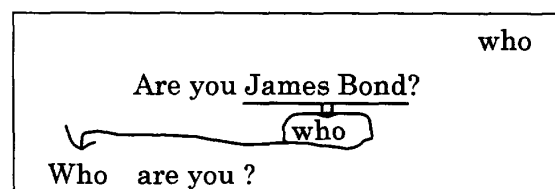
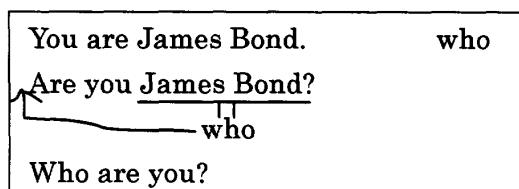
効果的な板書は生徒が新出項目を理解するにも、後で見てわかりやすいノートの作成にも役立つ。英語科教育法の受講生たちは、授業の初めに、読みやすい板書を目指してさまざまな例文や単語リストを教室のホワイトボードに書く。水平面に文字を書くことに慣れている彼らにとって、垂直面に、生徒に背中を見せることなく半身になって読みやすい文字を速く書くのは難しい作業である。板書練習で書いた後は必ず教室の後ろの席に座って生徒の視線で読み直し、見やすく修正したり書き直したりする。

板書の場合は生徒の目前で書くプロセスを見せるため、作業順や場所の検討が大切な点なのだが、模擬授業で初めて板書に取り組むと、たいていここがネックになる。そのため、2007年度は大半の受講生が介護実習に行っていて出席者が少なかった週に、時間をかけて板書計画の検討、実験、書き直し、という行程を行った。最初は使う例文すべての行頭をそろえて書いていたが、新しい構文の説明のために語句の配置が肝心なケースだということで、後でノートに書き写した形が参考書の図解のようになるよう、最初を書く文章の配置を工夫するなど、改良をほどこした。(図3)

図3 新しい構文導入のための板書計画

原案：説明に出てくる例文をすべて書く

改良案：重要ポイントのみ書く



¹³ 馬淵哲、南條恵 『人は「動き」だ!』 pp.134-137

翌週に介護実習から帰ってきたメンバーの前で、前回トレーニングを受けた受講生が板書を伴う文法説明のプレゼンテーションと、板書のそれぞれの段階のねらいを説明した。自分が改良案を考えたプロセスを1週間後に同級生に説明することで、受講生自身の認識が深まり、また、一回欠席した受講生たちも前回の授業内容がわかるメリットがあった。

板書より小型の視覚資料として教室でよく使うプリント教材に関しては、レイアウトの基礎を紹介しながら、作成者の工夫で生徒の教室での理解や復習を助けられることを体験させた。クラスでは、リーディングの教授法を勉強した週に受講生がさまざまな質問文を作成していた。その質問文を題材に、「そのまま生徒に配布できるようにA4サイズのプリントを1枚作成」する課題を次の回に出した。そして、ほかの受講生の作ったプリントに生徒役になって取り組み、問題文の読みやすさ、解答欄の書きやすさについて改善案を出し合った。文字の大きさやスタイルに関しては受講生間のアイデア交換が十分できていたので、筆者からは

- ・問題番号をつけると、クラスで答え合わせや説明の指示がしやすい。
- ・解答欄の形やサイズで、期待する答えの文字数や量を示せる。
- ・提出させて教員が添削・採点するつもりならば、解答欄をプリントの一辺にそろえておくと無駄な動きが少なく効率的に作業がしやすい。
- ・科目名や担当者名、通し番号、日付などの情報は、テスト前の復習に便利。

など、自分の経験から得た知識を話した。教材用のイラストの練習をした後だったこともあり、問題文のそばに目を引くイラストを加えたプリントを作っていた学生もいたが、レイアウトの視覚度や訴求度の原則を知って紙面の親しみやすさを上げたり、印象を強めたりできること、内容と乖離してしまうと逆効果であることなどを伝える機会になった。¹⁴

4 基本動作の組み合わせをマスタークラス形式で

2007年度は5分間の模擬授業を行う前の段階で、もっと短い、基本動作を組み合わせた一連の動きを「生徒役」付きで練習してその場で筆者が指導をする、ピアノなどのマスタークラスに当たる「公開おけいこ」を行った。授業中に3・4人の受講生が「教員役」をし、グループ練習のときよりも多い生徒役を相手に実践できる。パフォーマンスの時間が短いので多少失敗しても心理的ダメージは少ない。受講生たちがすべての基本動作を個々に認識しているので、教員役の受講生のパフォーマンスを的確に評価できる。複数の言葉と複数の動作を連動させるのが難しい場合は、まず動きのみ無言で、または動かずに言葉だけ、というパート別練習をしてから、両方を同時にしてみた。

マスタークラスで練習した課題の一つが、「例文を板書する・復唱を指示する・生徒をほめる」である。外国語の授業ではよくある場面で、すべてで20秒程度しかかからないが、教員と生徒の動作と発話をシナリオに起こすと、図4のようになる。

¹⁴ 視覚デザイン研究所・編集室 『レイアウト基礎講座』 pp.12-23, 30-40

図4 「例文を板書する・復唱を指示する・生徒をほめる」20秒間のシナリオ

Time	教員の動きと言葉	生徒の動きと言葉
00:00	生徒の方に体を向けたまま、半身で例文 “What time is it now?” を板書する。	前を向いて座っている。
00:10	生徒に正対して見回しながら “Everyone,” 片手で書いた文章を指し、その手をピタッ と止める。指したところをいったん自分も 注視する。手は動かさず、首だけ回して 生徒たちを見て、 “Repeat after me.” 一拍おく。 “What time is it now?” 生徒達の口元を確認する。 できていたらうなづく。 さっきとちがう場所の生徒達を見て “What time is it now?” 生徒達の口元を確認する。 微笑んで力強く	呼ばれて教員の顔を見る。 教員の手の動きを目で追う。 “What time is it now?” “What time is it now?”
00:20	“Very good!”	

この中には、「板書」「見せたいものに視線を集める」「ほめる」といった要素が含まれている。受講生たちはこれまで別々に練習した基本動作が、見慣れた語学の授業に連動してあらわれていることを認識する。授業担当者は「生徒役」の学生たちの後ろに立って、芝居の演出家のように「教員役」の演技に途中介入して動きを修正フィードバックしたり、もう一度始めからさせて、タイミングを外しがちなところにさしかかったら半拍早く「そこで（クラスの）右半分見る」「今、スマイル」といった言葉をかけたりして、スムーズな進行を補助する。完璧なタイミングで20秒が完了したら、すかさずほめる。スポーツ心理学の研究によれば、動きに関するフィードバックのタイミングは、動作の短期記憶が鮮明な15秒以内が最も効果的となる。¹⁵ たった20秒でもすべての基本動作を忘れずに実行するのは難しく、受講生たちは真剣に、互いの上達を認識しながら公開練習をした。

¹⁵ 高畑好秀 『掟破りのコーチング術』 pp.120-121

5 考察

この基本動作のトレーニングは英語力と同様、英語科教員に必要不可欠な技術であり、練習と省察によって上達する。特に2007年度の受講生によれば、動作を細かく分割して練習したことで何を目的にどう動くのか、どう話すのかを理解しやすく、非常に実践的な勉強で満足だとの科目の評価が高かった。現在彼らの5分間の模擬授業を見ているところで、どの学生も自分の動きへの意識が前年度の学生たちに比べて高いように思う。教材研究をして十分な計画を練ると同時に、効果的な授業のために事前によく考えて動き、話す態度を半期かけて身につけてゆく試みは、来年度以降もさらにさまざまな方法で続けてゆきたい。

参考文献

- 阿部フォード恵子 『教室ふれあい英語表現集』ピアソン・エデュケーション 2001年
市毛恵子 『「教え上手」になるためのスキル』あさ出版 2004年
稲田百合、長津芳、奥山文子 『新任教師のしごと 学級経営の基礎・基本』小学館 2007年
木塚雅貴 「イングランド・カナダにおける教員養成の比較研究」 *The Language Teacher* 31.8 2007年
絹川友梨 『気持ち伝わる声の出し方』角川書店 2003年
スティーブ・コーエン 『カリスマ手品師に学ぶ超一流の心理術』ディスカヴァー21 2007年
視覚デザイン研究所・編集室 『レイアウト基礎講座』視覚デザイン研究所 1998年
JACET教育問題研究会 『英語科教育の基礎と実践』三修社 1998年
高梨庸雄、高橋正夫 『新・英語教育概論』金星堂 2007年
高畑好秀 『掟破りのコーチング術』山海堂 2004年
永井淳子、粕谷恭子 『小学校の英語 教室で使える基本表現200』三省堂 2004年
本間正人 『[図解] ビジネス・コーチング入門』PHP研究所 2003年
Bryan Gardner, Felicity Gardner 『教室英語ガイド』旺文社 2005年
馬淵哲、南條恵 『人は「動き」だ!』日本経済新聞社 2005年
米山朝二、杉山敏、多田茂 『[改訂版]英語科教育実習ハンドブック』大修館書店 2002年